【57】大工にノミを持たすな!

”大工にノミを持たすな！” という伝説的な言葉があります。

現代ではあまり知られていませんが、戦前の建築学者の田辺平学(1898～1954)の言と伝えられています。東京工業大学に籍を置き、木造建築の耐震化や都市の不燃化の分野で活躍され、一般向きの書を多数出され、講演もこなすなど市民の啓蒙にも力を入れた先生です。

とくに住家を主とする伝統的な職人芸の木造建築の世界に、近代的な設計の概念を持ち込み、筋交い、方杖、火打など従来には無かった斜めの構造材を導入し、耐震性の強化に大いに貢献しました。

わが国の古典的な住家は、柱は一本ごとに独立して支持され、屋根が重い（瓦やその下の土の下地など）ので梁は太く重いのです。それを支持する柱に２方、３方ときには大黒柱のように４方向から梁が集まる柱と梁の接続部を小口（こぐち）といいますが、この小口は、柱に梁の「ほぞ」を受ける「ほぞ穴」を掘るので柱の実断面積が小さくなります。

地震時にはこの小口が破壊され、梁ひいては屋根が落下し、火事にならなくても梁の下敷きになって亡くなる人が多かったのです。

この事は江戸期はもちろんですが、近代に至っても、明治 24 年（1891）の濃尾地震、大正 12 年（1923）の関東大震災そして現代でも昭和 23 年（1948）の福井地震等でくり返された災害だったのです。

田辺先生は、この小口の脆弱性を改善するため、ほぞ穴を減らし、梁と柱を繋ぐのに当て板やボルトなど金物の使用を推奨し、そして前述の斜材の導入とあいまって木造建築の強度を飛躍的に高められたのです。（現代の標準となっている工法です。）

冒頭の言葉は、柱の小口にほぞ穴を設ける伝統的な職人芸を戒める意味で言われたのでしょう。

さて、話しは現代にとびます。

近年の東京の道路の街路樹は、自動車や沿道の商店や住家への影響を少なくするためか、剪定が盛んで、丸坊主になるほど刈り込むので、かねてから気になっていました。

道路で植栽工事という看板が出ていても、植栽工事は少なく剪定工事が多いので、根本は発注者側の考え方なのですが、実施している業者をもこれじゃあ造園業じゃなく伐採業ではないかと、陰口の一つも言いたくなります。

その私が、あるとき某農業大学から ” 都市景観と水と緑 ” について講義を頼まれたとき過剪定の事を話し、調子に乗って ” 造園屋にハサミを持たすな ！ ” とやったのです。以前何処かで仕入れた田辺先生のマネです。

休憩時間に学生が言いつけたらしく、終って控室へ戻ると世話役の教授がニヤニヤしながら私に一丁の園芸用の手バサミをプレゼントしてくれたのです。

これは京都産の銘柄品で、うちの新入生に一丁ずつ持たせているとの口上つきです。

いい歳をして冷や汗をタップリかきましたが、以来２０年、ベランダの草花の手入れに重宝させてもらっています。又、街路樹の過剪定も、グリーンインフラのかけ声だけで、一向に改められていないようです。